

16. 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

説教

ヨハネの福音書 3章 16節は聖書の中で最も有名なみことばです。これは聖書全体の内容を凝縮したものと言えらると思います。聖書が私たちに教える最も大切なことは何かと言えば、このみことばだと思います。これを外してしまつたら、もはやキリスト教とは言えない、キリスト教の中核、福音の神髄、それがこのヨハネの福音書 3章 16節です。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

「神は、…世を愛された。」 「世を愛された」の「世 ko,smoj」と訳される言葉は、イエスさまを信じる者と信じない者とを合わせた「世界中の人々」という意味でしょう。「愛された」の「愛する avgapa,w」という言葉の意味は、好き嫌いを超越し、あるいは見返りを期待することなく、「ただ一方的に愛する」愛のことで、これは別名「無限の愛」「無償の愛」「無条件の愛」「でも愛」さらには「敵を愛する愛」などといわれます。それは、ひたすら自分が犠牲を払って、相手のために仕え、奉仕する愛を意味します。つまり、神さまは、神さまのことを信じる者のことも、信じない者のことも愛しておられます。神さまを愛する者のことも、愛さない者のことも、限りない愛をもって、ただひたすら、一方的に愛してくださっています。それはちょうど、降り注ぐ太陽の光や恵みの雨のようです。神さまは善人も悪人も愛しておられます。その人が何か愛される価値があるから愛しておられるのではありません。愛する価値のない者を愛しておられます。ご自身に敵対する者をも、神さまは愛しておられるのです。

それでは、神さまが私たちが愛しておられるその愛を、私たちはどのようにして知ることができるでしょうか。その証拠をいくつも身近に見ることができます。例えば、神さまが私をこの世に造ってくださったという事実、そして、今こうして神さまに生かされているという事実は、神さまがこの私を愛しておられる証拠と行うことができるでしょう。あるいは、親兄弟や友人が与えられているとか、不自由な生活を送ることができているという事実、自分の豊かな才能、学校での良い成績、この世に於ける成功、スポーツなどの娯楽や健康なども神さまのお恵みで、これらも神さまに愛されている証しと言えるでしょう。しかし、このようなしは必ずしもいつもあるとは言えません。つまり、人間万事がいつもうまくいくとは限りません。例えば、人から裏切られたら、親や兄弟が死んでしまつたら、あるいは病気になったり、障害を負つたり、リストラされたり、試練に見舞われたら、一体どうなるでしょうか。果たしてその時にも自分が神さまに愛されていると言えるでしょうか。

私たちが神さまに愛されている証拠は、「そのひとり子をお与えになった」というただこの一点にあります。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」

この直訳は「このように神は世を愛された、それでそのひとり子を与えた(犠牲にした・見捨てた)」であり、神さまが私たちが愛するあまり、そのひとり子を犠牲になさつたことがよく表現されています。言うまでもなく「ひとり子」とは、神さまの御子イエスさまのことです。

つまり、神さまは、最愛の御子イエスさまを犠牲にするほど、私たちが愛しておられます。ご自身の最愛の御子、ひとり子のイエスさまと同じくらい、私たちが愛しておられます。私たちのためならイエスさまを犠牲にしても惜しくないほど、神さまは私たちがこの上なく愛しておられるのです。

そして、私たちを愛する神さまの愛は、イエスさまを十字架につけることであらわされました。「こういうやり方で神は世を愛された、それでそのひとり子を与えた(犠牲にした・見捨てた)」とも訳すことができます。つまり、神さまの愛は、「ひとり子を犠牲にした」ということだということです。それが神さまの愛だ、神さまの愛のあり方だ、「神さまに敵対して罪に滅び行く私たちを救うために、イエスさまを私たちの身代わりの犠牲にした」ということが、他ならぬ神さまの愛です。

「神はそのひとり子を世に遣わし、

その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。

ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

私たちが神を愛したのではなく、

神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。

ここに愛があるのです。」

(Iヨハネ 4:9-10)

ですから、私たちは、イエスさまの十字架を見上げるたびに神さまの愛を確信しなければなりません。たとえ人に裏切られても、病気になっても、障害を負っても、試練に見舞われても、神さまに愛されていることを疑ってはなりません。私たちの身代わりにイエスさまを十字架につけたということが、私たちへの神さまの愛なのです。たとえどんなに大きな試練に見舞われたとしても、私たちへの神さまの愛は揺るぐことはありません。

それならどうして試練に遭うのかとある人は思うでしょう。神さまに愛されているなら、どうして不幸な目に遭うのか、神さまに愛されているというのに、どうして試練に遭うのか、と神さまの愛を疑うことでしょう。しかし、それでも神さまの愛は揺るぐことはありません。なぜなら、神さまの愛はキリストの十字架に於いて完全にあらわれているからです。そして、その前提で自分の人生を再考するならば、神さまに愛されているのにどうして試練に遭うのかと考えるのは正しくなく、むしろ神さまに愛されているからこそ試練に遭うと考える方が正しいと言えるでしょう。そして、試練も含めて、私たちの日常に起こるすべてのことは、神さまに愛されているという、揺るぐことなき大前提の上に起こるのであり、一つ一つの出来事は余す所なく神さまの愛を証ししている、と理解することができるのです。詩篇 19 篇のみことば通り、「天は神の栄光をあらわし、大空は御手のわざを告げ知らせ」ます。天地万物、森羅万象の一切が、私たちへ注がれた神さまの愛を反映しています。すべてが愛のメッセージです。「キリストの愛が私たちを取り囲んでいる」のです (IIコリント 5:14)。私たちは、たとえ試練に遭ったとしても、それは決して耐えることのできない試練ではないということを知らねばなりません。

「あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。

神は真実な方ですから、

あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。

むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」

Iコリント 10:13

日本による神社参拝の強制に抵抗して殉教した朱基徹牧師の四男、朱光朝長老の話を聞きました。その証しを聞いて、この方ほど辛い幼少期を過ごした人はいないと思いました。朱光朝長老は、7歳の時にお父さんが刑務所に入り、それから6年後の13歳の時に平壤刑務所で殉教しました。その間、日本の警察による嫌がらせのために、食糧の配給がストップし、食べる物がなくて、一杯のお粥を三度に分けて食べました。完全に食糧が尽きた時、お母さんは「飢えているより、断食して祈りましょう」と家族全員で何日も断食したそうです。そうこうしているうちに、父親は死んでしまいます。そして、骨と皮だけになって、棺桶も買えないからりんご箱に入れられて運ばれてきます。加えて、日本に迫害されて、学校をやめさせられて、戦争が終わるまで勉強をすることができませんでした。そうして、戦争が終わり、これからという時、その二年後に母親は乳癌で死んでしまいます。それからというもの、ずうっと食うや食わずの貧しい暮らしで肺結核にもなり、あまりに

苦勞しすぎたためか、神さまから心が離れてしまいます。神さまに祈ることもやめてしまったそうです。遅れながらも苦學して大学で学び、金で苦勞したから、とにかく金を儲けるために、教会にも行かずに仕事に没頭したため、みるみる昇進して、遂には韓国で一番大きな石油会社の社長にまでなりました。しかし、そこに至るまでの15年間、彼は完全に神さまから離れておりました。その原因は、どうして神さまがおられるなら、自分にこんな苦勞を負わせるのかというものでした。しかも、その苦勞は自分が罪を犯して苦勞した苦勞ではない、父も母も最も忠実に主に従った上で死んだのであって、最も忠実に主に従って生きた殉教者の家族がどうしてこうも報われず、この世でこうも惨めに生きねばならないのかという、自分の父と母、そして神さまに対する恨みでした。それで、神さまが助けてくれないのだったら、自分がこの手で、自分の実力で祝福をつかんでみせるということで、長い間、神さまに背を向けて生きていたのです。

しかし、ある時、実業家たちの聖書研究会で、コリント I 10:13 のみことばを引用しながら、そこに招かれた牧師が次のように説教しました。「過去の痛い傷痕を清算しなければなりません。これから新しい信仰の人生が始められるのです。神さまは過去も現在も朱執事が耐えられないような試練に遭わせることはなさいません。たとえ過去の苦しい環境のために挫折し、苦難にも直面されたでしょうが、神さまは真実であり、朱執事を試練によって訓練し、より一層大きな光榮と尊さを得られるようにするからです。」

「神は真実な方ですから、

あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。」

I コリント 10:13

このみことばを聞いて、朱光朝長老は目が開かれました。自分ほど苦勞した人間はいないと思っていたけれど、しかしよく考えてみると、これまでどんなに酷い試練も耐えて生きてくることができた、みことばの通り、確かに神さまは耐えることのできない試練に遭わせることはなさらないお方だと悟ったのでした。そして、それから再び熱い信仰が回復して、神さまに祈るようになったというのです。

16. 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

神さまは、そのひとり子をお与えになったほどに、私たちを愛されました。その愛は、ひとり子をも賜る愛です。これ以上ない愛です。これ以上の愛を示せと言われても、示しようのない愛です。最高の愛です。この上ない愛です。たとえこの世で試練に遭ったとしても、それは神さまに愛されていないから試練に遭ったのではなく、むしろその反対に、神さまに愛されているからこそ、試練に遭ったのです。私たちの全生涯は、たとえ何があっても、神さまに愛されているという不動の礎の上に築かれ、今日も今週も展開していくのです。

そして、最後に、この神さまの愛が何を目指しているかを見てみましょう。

16. 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

これによると、神さまがどうして私たちを愛しておられるのか、その目標は「御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つため」であると言います。実はこの文脈は、イエスさまとニコデモとの論争の中で語られている文です。そこでは、どうすれば新しく生まれ変わることができるか、天国を見ることができるか、永遠のいのちを得ることができるかということが議論されます。ここでの論点の中心は「救い」なのです。そしてその結論として、イエスさまは、旧約時代のモーセの「青銅の蛇」を例に挙げながら、ちょうどそのように、ご自身の十字架によって救われるというのです。ご存じの通り、モーセの時代、荒野を彷徨っていたイスラエルが、

「なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。

パンもなく、水もない。

私たちはこのみじめな食物に飽き飽きした。」

こう言った瞬間に、「主は民の中に燃える蛇を送られ、蛇は民にかみつ、イスラエルの多くの人々が死んだ」のでした。しかしそういう中で、燃える青銅の蛇を旗ざおの上につけて掲げて、蛇にかまれてもそれを仰

ぎ見ると助かりました。ちょうどそのように、自らの罪の故に滅び行く私たち罪人も、十字架のキリストを仰ぎ見て救われ、永遠のいのちにあずかるのです。イザヤ書の預言に次のようにあります。

「地の果てのすべての者よ。

わたしを仰ぎ見て救われよ。」 イザヤ 45:22

私たちは、どのようにして救われるのでしょうか。

「わたしを仰ぎ見て救われよ。」

十字架のキリストを仰ぎ見て、救われるのです。十字架のキリストは、神の愛です。神さまが私たちを愛しておられる証し、証拠なのです。いわば天国の神さまが、地獄の淵にいる私たちに御顔を向け、救いの手を差し伸ばしておられるのです。私の身代わりにひとり子イエスを十字架につけ、私の罪をイエスさまに負わせて、私の罪を贖ってくださったのです。そうやって、私が永遠のいのち・天国に入る道を開いてくださっているのです。だから、あとはそれを受け入れるだけで救われます。すなわち信じるだけで救われます。あげると言って差し出してくれているものを、感謝してそのまま受け入れるだけで救われるのです。

16. 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

ここまで神さまが愛してくださっているのですから、あとはただその「御子を信じる」ならば、「ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つ」ことができるのです。

神さまは私たちを愛してくださっています。最愛の御子イエスさまと同じくらい愛しておられます。私たちのためなら、ひとり子イエスさまを犠牲にしても惜しくないくらい、私たちをこの上なく愛しておられます。そして実際に、私たちのためにイエスさまをこの世に送り、私たちの身代わりに十字架につけて、私たちの罪を贖ってくださいました。神さまは、私たちが一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つことを願っておられるのです。

ここに集われた、神さまにこの上なく愛されている兄弟姉妹みなさんが、御子を信じて、御子イエスさまを信じて、一人も滅びることなく、永遠のいのちに与ることができるよう心から祈ります。